

鯨 研 通 信



第416号

2002年12月

財団法人 日本鯨類研究所 〒104-0055 東京都中央区豊海町 4番5号 豊海振興ビル5F 電話 03 (3536) 6521 (代表)
 HOMEPAGE <http://www.icrwhale.org>

目次

チュコトの捕鯨	大隅清治	1
ブラジルの捕鯨 ()	岸和田仁	9
日本鯨類研究所関連トピックス (2002年9月~11月)		16
日本鯨類研究所関連出版物等 (2002年9月~11月)		17
京きな魚 (編集後記)		19
ストランディングレコード (2002年9月~11月受付)		20

チュコトの捕鯨

大 隅 清 治 (日本鯨類研究所)

はじめに

チュコトは、ロシアの極東に位置する、人口12万人弱 (日本の約1千分の1) の自治管区である。この自然環境の厳しい極北の地にも、太古から人間は住んでおり、今も陸のチュクチ人はトナカイを放牧し、海のチュクチ人とエスキモー人は海獣類を捕獲して、細々とした生活を営んでいる。

2002年9月下旬に、私は水産庁の使節団の一員としてこの地を訪れ、IWCが許している先住民生存捕鯨の実態を視察する貴重な機会を得た。そこで、その得がたい経験と関連する文献を基に、日本ではこれまであまり知られていない、チュコトで行われている先住民による捕鯨の歴史と現状に付いて、報告を兼ねて、その概

略を紹介したい。

チュコト地方の海の自然

環 境

図1に示すように、チュコトはシベリア東端に位置し、周りをチュクチ海 (北極海)、アラスカに接するベーリング海峡、そしてアナデル湾 (ベーリング海) に囲まれた、北緯62-72度、東経159度 - 西経170度に位置する約74万平方km (日本の約2倍) の半島であり、最高でも海拔1,879mの低い山と、ツンドラと、多くの湖、河と永久凍土で覆われる、極北の荒涼たる自然の土地である。

海岸の気温は1月に - 17ないし - 40度C、7月に + 4ないし + 10度Cである。海岸は6月に

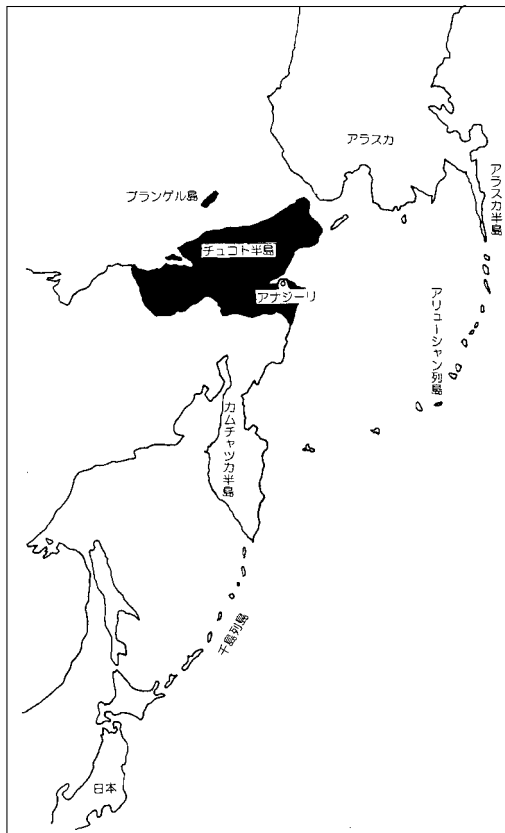


図1．ロシア・チュコト自治管区の位置と範囲（黒く塗りつぶした部分）。

海氷が溶け出し、短い春と夏と秋を迎えるが、11月には再び海氷が凍り始める。陸では10月から雪が積もり始め、6月まで溶けない。極北に位置しているため、夏は白夜となり、冬は黒昼となる。

周囲の海岸には遠浅の海が広がり、コククジラの絶好の餌場となっている。

この厳しい自然環境の中で太古から生活する先住民は現在、モンゴロイド系の1万4千人のチュクチ人と約2千人のエスキモー人である。

ツンドラと永久凍土と無数の沼と河に広大な土地が覆われているために、自動車を通れる道路が作れず、まして鉄道を引くことはできず、各部落は今でも孤立した生活を余儀なくされている。交通手段としては、ヘリコプターかトラ

クターに頼るか、解氷期には船舶、積雪期には犬橋を用いている。ヘリコプターは、わずかな悪天候でも使えず、今回のわれわれの捕鯨部落の視察に際しては、天候の回復を待って、予定が大きく変更され、交通手段の入手の厳しさを実感した。

分布する海獣類

チュコト沿岸海域には表1に示す海獣類が分布する。海のチュクチ人とエスキモー人は太古からそれらを捕獲、利用して生活している。解氷期には主として鯨類を、そして結氷期には鱈脚類を捕獲する。鯨類の内最も捕獲し易いのは小型のシロイルカであり、動作が鈍く、死ぬと浮くホッキョククジラがチュクチ人に捕鯨対象として最も好まれてきた。また、餌場が近くにあり、比較的動作の鈍いコククジラも太古から捕鯨の対象とされてきた。しかし、遊泳速度の速いナガスクジラ科の鯨種は今も捕獲の対象となっていない。

チュコトの捕鯨の歴史

チュコトの捕鯨は先住民によって生存のために有史以前から営まれ、その歴史は、原始期、沈滞期、移行期、近代期、現代期の5期に分けられる。

原始期（～1870）

太古の墓から出土する鯨の骨を調べて、遅くとも西暦1世紀には、コククジラとホッキョククジラを対象とした捕鯨がすでにこの地方で行われていたと推定されている。この時代に捕獲された鯨の骨から、ホッキョククジラに加えて、捕獲し易いコククジラの子供を選択的に捕獲する、かなり特殊な捕鯨がこの時代に行われていたようである。カヌーと手投げ鉞によるこの期の捕鯨は18乃至19世紀まで続き、それに伴う宗教行事ないし捕鯨文化は20世紀の中頃まで続いた。

沈滞期（1871～1916）

この期は1870年代から始まる。この期の特徴は、主要な鯨種の資源が極端に減少したことである。それは1850年代から開始された北極海におけるアメリカ式帆船捕鯨の乱獲によってホッキョククジラ資源が減少し、カリフォルニア半

島における沿岸捕鯨によってコククジラ資源が減少したからである。そのために、特に1870年代から90年代に掛けて、チュコトの多くの部落で捕鯨ができなくなり、先住民は飢餓に見舞われた。

住民の捕鯨者の多くはこの時期にアメリカ式捕鯨船に水夫として雇われて働いた。その間に捕鯨技術を学び、捕鯨用具を入手して、解雇されてから、自らホッキョククジラの捕獲を試みたが、資源が極端に減少していて、それはうまく行かなかった。

この時期でも、4つの部落が以前のようにコククジラの子供を捕獲していた。

移行期（1917～1968）

この期は、1917年のロシア革命による社会体制の改革から始まる。それまでチュコトの捕鯨

は伝統的な世襲制によって継続してきたが、革命によってチュコトもソ連社会主義体制に入り、世襲制が崩壊した。

この時期には、チュコト半島でのコククジラの資源の回復とともに漁場が次第に拡大し、捕獲量が増加した。この増加はホッキョククジラの捕獲が減少が続き、1930年代から50年代に掛けて、このクジラは1頭も捕れなくなったので、捕鯨者はコククジラの捕獲に専念せざるを得なかったことにも起因する。1930年代の終わりにホッキョククジラを捕獲した部落において、最後の鯨祭が行われて以来、その種の宗教行事は絶えている。

1930年代から1940年代にかけては、木製のモーターボートか皮張りのボートで金属製の銚先とアザラシの皮でできた浮きを付けた手投げ銚

表1．チュコト沿岸海域に分布する海獣類

目	種	チュクチ海	ベーリング海峡	アナデイル湾
食肉類	ホッキョクグマ	○	X	X
鳍脚類	トド	X	○	○
	セイウチ	○	○	○
	アゴヒゲアザラシ	○	○	○
	ゴマフアザラシ	○	○	○
	ワモンアザラシ	○	○	○
	クラカケアザラシ	○	○	○
鯨類	イッカク	○	X	X
	シロイルカ	○	○	○
	シャチ	○	○	○
	ネズミイルカ	○	○	○
	コククジラ	○	○	○
	ホッキョククジラ	○	○	○
	ナガスクジラ	○	○	○
	ミンククジラ	○	○	○
	ザトウクジラ	○	○	○

○：分布する、X：分布しない。

とライフルを装備していた。1950年代になると、スクナー船やカッターボートと大口径の銃を装備した。この時代も大型のコククジラは捕獲できず、手投げ銃を打ち込み、数百発の弾丸を射入しても捕獲できない鯨の割合は高く、30%の鯨が死んで沈下し、他の30%の鯨は傷を負っても逃げてしまった。

1940年代の終わりから1950年代の初めに掛けて捕鯨の部落にも集団農場制が導入され、1950年代の終わりまでにコククジラを捕獲するコルホーズは15に達した。

1930年代の終わりまでは、コククジラの捕獲数は年間8～12頭であったが、1950年代の中頃にはそれが40～60頭に増加し、1950年代の終わりには捕獲頭数が100～150頭に達し、捕鯨場が拡大した。

近代期（1969～1991）

政府指導による捕鯨集団のコルホーズ化がさらに進み、それまでの伝統捕鯨による非効率な操業を防ぐために、1969年から政府所属の1隻のノルウェイ式近代捕鯨船・ズゼヨーズ号による、先住民のための、捕鯨砲を用いての捕鯨が開始された。この措置により、チュコトの先住民自身による伝統的な鯨の捕獲作業は中止された。

この1隻の捕鯨船が安定した操業を行い、捕獲したコククジラをそれぞれの部落に分配し、そこで鯨が解体され、利用された。部落に渡した後の鯨の処理と利用法は、それまでと同じであった。

現代期（1992～）

現代期は1991年12月にソビエト政権が崩壊し、ロシア連邦に移行した翌年から始まる。しかも、それに伴い、近代捕鯨船が老朽化しても政府の援助が打ち切られたため、修理ができず廃船となり、捕獲手段が失われた。近代期の22年の間は、近代捕鯨船の操業に全面的に頼っていたために、伝統的な捕鯨技術と捕鯨用具は失われてしまい、近代捕鯨船が使用できなくなった1992、93年には、図2に示すように、シロイルカのわずかな捕獲を除いて、コククジラの捕獲はIWCによって許されていたにもかかわらず、全くできなかった。

そこで、1994年に伝統捕鯨による捕鯨法を復活させる努力が先住民の手によって開始され、多くの人命の犠牲を払いながら、次第に捕獲技術を向上させていった。捕鯨技術と捕鯨用具の各部落への普及とともに、次第に捕獲頭数を増加させて行き、現在に至っている。そして、この間に、アラスカの先住民生存捕鯨者と緊密な

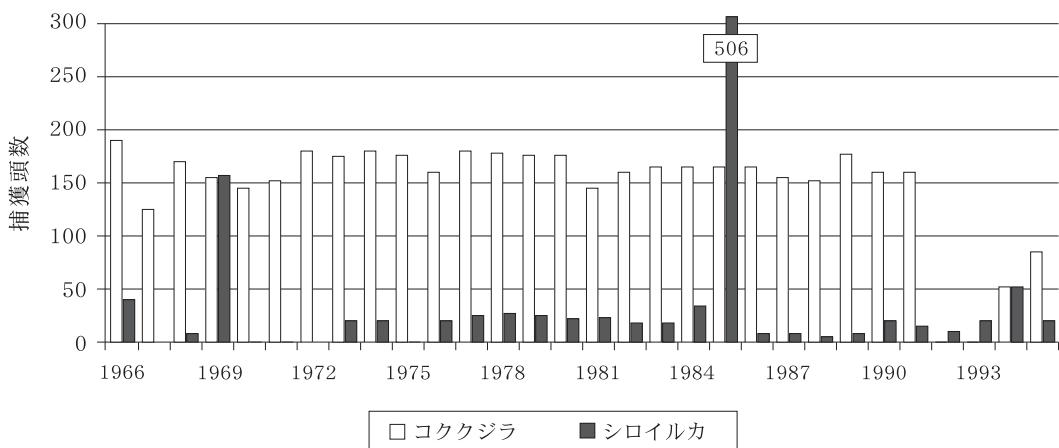


図2．チュコトの先住民による鯨類の捕獲量の変遷（1966～1995）

関係ができ、1996年にイヌイト人からダーテイングガン約30丁が供給された。日本はロシア政府の呼び掛けに応じて、1999年にチュコトの捕鯨者のために捕鯨機材の供与を実施した。

1998年に、米国とロシアの取り決めによって、IWCがその年決めた5年間の先住民生存捕鯨の捕獲枠の中で、コククジラ年間5頭の捕獲枠を米国のマカ族の捕鯨のために移管するとともに、毎年上限5頭（2002年までの5年間に総計20頭）のホッキョククジラの捕獲枠を米国から譲り受けて、チュコト先住民の永年の念願であったホッキョククジラの捕獲が復活した。

チュクチの捕鯨の現状

今回の視察中、チュコト自治管区政府のご好意により、ヘリコプターを利用させて頂いて、1度だけ、2時間足らず、捕鯨部落を視察する機会を得たが、残念ながら、捕鯨操業や解体の現場に立ち会うことができなかった。しかし、捕鯨従事者に会い、捕鯨ボートの実物に触れ、捕鯨用具を手にし、鯨体の一部を試食することができた。また、捕鯨操業のビデオを見る機会もあり、資料も収集できた。それらの視察結果、資料と文献を用いて、以下に捕鯨の現状に付いて報告する。

チュコト半島で捕獲されている海獣類

海獣類を捕獲して利用している部落はチュコト半島の沿岸に広く分布しており、その数は現在42ある。

海獣類の捕獲はソ連邦天然資源省天然資源環境保護局によって枠が定められており、同局のチュコト自治管区事務所によって管理されている。表2に2001年における海獣類の捕獲割当量を示す。最近における海獣類の種類別捕獲割当量の総量を表2に示す。海のチュクチ人とエスキモー人が海水の溶けている間は主として捕鯨に、そして結氷期には鯨脚類を捕獲するか、トナカイの放牧の手伝いをするかして生活している。

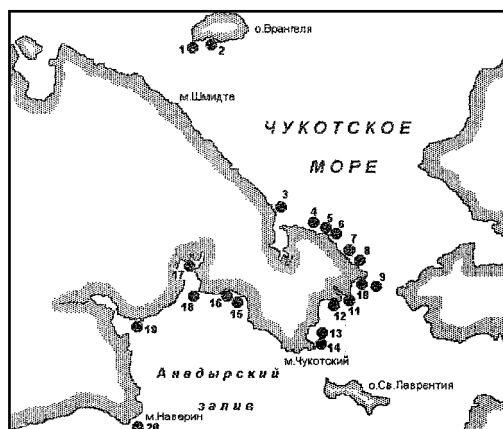
捕鯨部落の分布と捕獲割当量

チュコト沿岸で海獣類を捕獲している主要な村の位置を図3に示す。海獣類を捕獲している部落の中で、コククジラを対象にした捕鯨が行

われている村は、2001年現在14部落ある。その中でホッキョククジラの捕獲割り当てがある部落は4部落である。また、シロイルカのみを捕獲している部落が9ある。その他に、鯨脚類のみを捕獲している部落が19ある。表3に鯨類を捕獲している村の名と、2001年における捕獲割当量、および捕獲実績を示す。コククジラとホッキョククジラはIWCによって規制されている

表2 . チュコトの2001年における海獣類の種類別捕獲割り当て頭数

種 類	割り当て頭数
ワモンアザラシ	5,000
ゴマフアザラシ	500
クラカケアザラシ	200
アゴヒゲアザラシ	2,100
セイウチ	2,950
シロイルカ	300
コククジラ	135
ホッキョククジラ	5



- | | | |
|----------------------|--------------------|------------------------|
| 1. мыс Блоссом | 8. мыс Инцова | 15. коса Рудера |
| 2. коса Сомнительная | 9. о. Б. Дюмид | 16. коса Китовая |
| 3. о. Колочин | 10. мыс Дежнева | 17. коса Эруля |
| 4. о. Иллидя | 11. Нунымо | 18. о. Коса Меечкын |
| 5. мыс Сердце-Камень | 12. мыс Кригуйгун | 19. коса Русская кошка |
| 6. мыс Инкигур | 13. о. Аракамчечен | 20. мыс Наварин |
| 7. Утен | 14. о. Нуванган | |

図3 .チュコトの海獣漁を営む主要な村の分布。

表3 . 村別鯨種別捕獲割当頭数(A)と実績(B)

鯨類捕獲村名	シロイルカ		コククジラ		ホッキョククジラ	
	A	B	A	B	A	B
ザボリアリエ(2)	15	8	4	4	0	0
ピオブダウルキン(3)	40	0	24	15	1	0
ケレル	30	19	71	66	1	0
ナウカン	10	0	9	8	1	1
ラブレンチア	1	1	0	0	0	0
ドロビゼンスコエ(5)	34	0	15	14	2	0
ノボザリノ	10	0	0	0	0	0
シレニキ	15	0	0	0	0	0
ヌンリグラン	5	0	0	0	0	0
イエンメルブ	5	0	0	0	0	0
ポストークアグロ	0	0	6	3	0	0
カンツァランスキイ	3	1	0	0	0	0
レブコム チコツキ	3	0	0	0	0	0
エブエブ	3	1	0	0	0	0
ユートク	6	1	0	0	0	0
パプロフスカヤ スロボダ	20	2	0	0	0	0
ベクレネイ	0	0	3	2	0	0
予 備	100	0	3	0	0	0
合 計	300	33	135	112	5	1

括弧内の数字は村内の捕鯨部落数。

ので、捕獲割当量はロシア連邦天然資源省の直接管理の下に置かれるが、シロイルカに付いてはIWCの管理下にないので、地元の規制局が許可を出す。

捕獲割当量は知事直轄のチュコト民族漁村政策会議で、捕獲実績や違反の有無などを勘案して各部落に配分する。

また、捕鯨の取り締まりは、国境警備隊から4年前に組織変更した漁業規制委員会が実施している。

さらに、捕鯨者の団体として、「伝統捕鯨チュコト協会」(ロリノに本部を設置)が組織され、捕鯨者の権利を守り、捕鯨技術の普及に努めている。

漁 具

部落単位で1、2隻の6～8人乗り船外機付

きのボート(図5にその1隻が見える)に手投げ鉾数丁、ライフル銃数丁と弾薬を搭載する。手投げ鉾は、金属製の鉾先、ロープ、プラスチック製の浮きからなる(図4)。1996年に米国から供給されたダーティングガンは現在、普通は使用していないようである。

日本政府は1999年にチュコトの捕鯨者に船外機などの漁具の機材供与を行っている。今回の視察は供与された機材の現状を調査するとともに、捕鯨者からの要望を聴取することを目的にしたが、彼らは曳鯨船の必要を訴えていた。捕鯨ボートは馬力が小さく、曳鯨に1日を要することもあるという。

漁 法

捕鯨従事者は現在合計約600人おり、男性のみである。8才頃から捕鯨に参加し、50才から年金が貰えるので、それまでに止める。天気の良い朝早くから出漁し、探鯨を開始する。鯨を発見すれば、それに接近し、浮き付きの手投げ



図4 . チュクチ捕鯨者と、捕鯨に使用されている、手投げ鉾、ロープ、浮き、そしてライフル銃(日本捕鯨協会久保氏撮影)。

銃を投げ、ライフル銃で弾丸を発射して、殺す。ホッキョククジラは脂皮が厚いので、死んでも沈まないが、コククジラは死ぬと沈むので、多くの浮きを鯨体に付けることを必要とする。

処 理

捕鯨ボートで捕獲した鯨を岸まで曳航し、待機していた仲間に渡す。部落の人が処理を手伝い、トラクターで鯨体を引き上げて、解体する。図5にトラクターで砂浜に引き上げられたコククジラを示す。また、丸い浮きと捕鯨ボートも見られる。解体設備はなく、砂礫状の砂浜で解体、処理が為される。使用している大包丁は欧米式の刃の先端が湾曲した型のものである。

生産物の分配

冷蔵庫のような保蔵設備はなく、11～4月までは天然の冷蔵が可能であるが、少し暖まると、腐ってしまう。解体処理した生産物は切り分けて直ちに部落民に分配する。分配される鯨体は、無料ではなく、ボートの燃料、弾丸、その他の消耗品の購入費に充当するために、鯨の部分の

如何に関わらず、重量の1kg当たり3～5ルーブルで部落民に販売する部落が多いと聞く。

肉は、生、または煮たり、燻製や乾燥肉にしたりして、食用にする。舌、心臓、腸などを塩と香草や玉ねぎのような野菜を加えて煮て、スープのようにしたり、背肉、舌、腸をミンチして、ハンバーグにするなどの料理がある。脂皮は生（マクタク）で、或いは煮たりして食べ、また油を取る。肉、皮、腸は乾燥して、保存食ともする。油は照明や暖房に用いる。肉や内臓の一部は犬の餌になり、他の一部は漁業用の餌として使っている。

冷凍の設備や交通の手段が殆どないので、生産物は地元で消費する。私たちが数日滞在していたチュコト自治管区の首都のアナデイルでは、スーパーマーケットにも鯨肉は見当たらず、ホテルの料理人も視察した捕鯨部落で頂いてヘリコプターで運んできた、鯨の脂皮の料理法を知らなかった。



図5 . チュコトで捕獲され、トラクターで海岸に引き上げられたコククジラ。球形の浮きと捕鯨ボートが見える（ミフノウ氏提供）。

提出文書

コククジラとホッキョククジラの捕獲割り当てを受けた部落には、天然資源省から「捕獲パスポート」の用紙（A4サイズ）が渡され、捕獲した個体毎に以下の項目に記載し、同省に報告する義務がある。

用紙の表面には、捕獲日付、出漁時分、発見時分、1番銃を投げた時分、最初のライフル銃の発射時分、鯨の死亡時分、帰還時分、捕獲位置、その岸からの距離、使用漁具の形式、使用手投げ銃数、使用ダーティングガン数、命中手投げ銃数、命中ダーティングガン数、命中弾丸数、揚鯨地点、気象、海氷状況、備考（捕鯨操業の詳細、鯨の行動等）の記入欄があり、裏面の様式に従って、捕獲鯨の種類、性、体長、体重、肉重量、皮脂・骨重量、外傷の有無、胎児、乳分泌、採集標本、標本採集者の氏名、捕獲パスポートの記載者の氏名・職名、捕鯨責任者の氏名・職名、提出日付、を記載する。

シロイルカに付いては「捕獲パスポート」の提出は義務付けられていない。

資源調査

首都のアナデイルにTINRO（極東漁業研究所）の支所があり、海獣類研究部の下に、鯨類研究室が設置され、1名の専門研究者が捕獲対象の3鯨種の資源研究に従事している。調査研究の一環として、鯨類の目視調査を沿岸から実施している。これだけでは不十分なので、2001年から調査船と飛行機も使用するようになった。また、2001年には、シロイルカの人工衛星標識調査も実施した。アナデイル支所は、ウラジボストックにあるTINRO本所を通じて、VNIROにより統括されている。

おわりに

チュコトは日本から遙かに遠いように思われ

るが、東京から首都のアナデイルまで、直線距離で約4千kmしか離れていず、タイのバンコックよりもずっと近い位置にある。そして、日本人と同じモンゴロイド系の先住民が遅く生活し、日本人と同様に、有史以前から鯨類を、海の幸として、利用している。われわれはチュコトの捕鯨者をもっと身近な仲間として、仲良くしたいものである。

それにもかかわらず、われわれはこれまでチュコトの捕鯨を知らなすぎて来た。今回の視察もほんの数日であり、しかもその中で捕鯨部落に滞在した時間はわずかに2時間足らずであった。従って、この記事は時間を十分に掛けて現地で調査し、研究した結果から書かれたものでなく、ロシア語のハンデイキャップも大きかったために、間違っていたり、誤解している部分が多いに違いない。

この記事が若い人の興味を引き、捕鯨や鯨類資源の科学や文化について研究したいという意欲を燃やしたり、チュコトと日本との捕鯨を通じての交流を盛んにしたりする切っ掛けになり、チュコトの捕鯨に付いて正しい理解が得られるようになれば幸いである。

最後に、今回の視察に際して、種々にお世話を頂いた主要機関と人々の名を以下に記して、厚く御礼を申し上げます。水産庁（長友遠洋捕鯨係長）、駐ロシア日本大使館（久保寺一等書記官）、日本捕鯨協会（久保事務局員）、久保田通訳、ロシア科学アカデミー（イリアシェンコ会員）、チュコト自治管区政府（ヤロシェンコ副知事）、チュコト自治管区漁業委員会（ミフノウ副議長）、伝統捕鯨チュコト協会（イナンケウヤシ会長）、チュコトTINRO（ダツキー副所長）、VNIRO（ボロジン副所長）、イウルチン単一地方農業・工業企業体（コルビコフウエルカリ地区長）。

ブラジルの捕鯨（ ）

岸和田 仁（株ニチレイ）

はじめに

ブラジルの捕鯨は、1985年の漁期を最後にその歴史を閉じた。1912年から73年に亘って続けられたこの沿岸捕鯨はブラジルの中でも貧しいノルデスチ（東北部）で事業展開されたため、地元の社会・経済にとっても重要な産業となっていた。

昨年（2001年）末、「ブラジルの捕鯨に携わったニチレイ並びに同社現地法人の足跡を日本の関連誌に残しておいてはどうか」との誘いが（財）日本鯨類研究所理事長大隅清治博士より上田清久氏（元（株）ニチレイ専務、元ブラジル現地法人社長）に持ち掛けられた。折角のお誘いなので、先輩諸氏の多大なる協力を仰ぎつつ、元現地駐在の筆者（ブラジル駐在：1979 - 1995）がこの小文をまとめてみた。

前史 - 植民地時代の捕鯨 -

16世紀から19世紀までのブラジル経済史は、サトウキビ、金、コーヒーという三大サイクルで特徴づけられるが、これら主要産品と比較すれば経済的重要性は副次的であったにせよ、いくつかの採集産業が小サイクルを形成していた。具体的には、木材、塩、硝石、タバコ、マテ茶などであるが、捕鯨もそのような位置付けの地場産業であった。

「捕鯨は、植民地では一時非常に栄えた。18世紀後半にはさまざまな捕鯨基地が、パイアからサンタカタリーナにまで広がっていたが、その後者の方は最も重要であった。この捕鯨は国王の独占下にあったが、漁獲の仕事は特許会社に与えられた。捕鯨は、ある程度の重要性を持つに至ったが、18世紀末には衰退してしまった。当時、英国や米国の捕鯨船がフォークランド諸島で操業を開始し、それが鯨のブラジル沿岸までの冬期回遊を阻止してしまった。それら

の捕鯨船は大規模で近代的な漁獲方法で乱獲をし、鯨を激減させてしまった。1801年この捕鯨権の契約者がいなくなったので、国王は独占を放棄して自由な漁獲制に変えたのである。そして衰退の一途をたどりつつも、この漁獲はいまだに続き、完全に消滅したのは1830年前後であった。」（C・プラド・Jr「ブラジル経済史」山田陸夫訳 新世界社 1972 p.131）

このように要約したカイオ・プラドは唯物史観の立場からブラジル経済史を体系づけたブラジルの代表的歴史学者であるが、今やブラジル史研究の古典となっている彼のデビュー作「現代ブラジルの形成」（原著1942年）においてはじめて植民地期の捕鯨の重要性を指摘している。

では、実際どのような捕鯨が行われていたのだろうか。

幸いなことに、ミリアン・エリス著「ブラジル植民地時代の捕鯨」（“A Baleia no Brasil Colonial” Ed.USP 1969）という、膨大な一次資料を調査した上で書き上げられた実証的な歴史書が出版されているので、この本（全240ページ）に基づいて植民地期の捕鯨を駆け足で追いかけてみたい。

ブラジル捕鯨はビスケー湾でのバスク捕鯨のノウハウを導入して1602年に開始されたが、当初は当時の首都サルヴァドール近辺をベースとしていた。漁期は6月から9月までの4ヶ月間で、捕獲頭数は18世紀前半で毎年100 - 200頭前後であった。鯨種は、文献だけでは不鮮明であるがセミ鯨、ザトウ鯨が主体と思われる。

捕鯨は8人乗りの小型帆船によって行われ、鋳打ち、舵取り、漕ぎ手といった役割分担が決められていた。実際に乗組んでいたのは黒人が主体で奴隷の場合もあったが、自由黒人が多く、一部インディオや白人の乗組員もいた。陸上の鯨処理場は、当時ブラジル経済の機関車役であったサトウキビ加工場のミニ版といえるもので



写真1．捕鯨基地の全景
(コスチーニャ、1979年頃)

あった。すなわち、エンジェーニョと呼ばれた製糖工場と同様に、「主人屋敷＋奴隷小屋＋小教会」のセットが家内工業的製油場に付属して一つの小世界を構成していた。

サルヴァドールのイタポアン海岸やイタバリカ島などは今日では大型ホテルが林立する高級リゾート地に変貌しているが、17 - 18世紀当時は数ヶ所捕鯨場が設けられていた。17世紀後半には同じ形態の捕鯨基地がリオ（今日のニテロイ）からサンパウロ沿岸（サントス、サンセバスチャン、カナネイアなど）へと南進し、1740年にはさらに南のサンタカタリーナにも広まった。それぞれの地区で年間数十から数百十頭が捕獲されていたとみられるので、植民地期全体の捕獲頭数は相当数に及んだと思われる。

主要生産物の鯨油は灯油として使われただけでなく、ロウソク、石鹸、化粧品などの原料としてあるいは接着剤（石造建築物のセメント役）としてブラジル国内で消費されていた。鯨油の一部はヒゲとともにポルトガル本国や英国・オランダへ輸出されていた。また鯨肉は塩漬けされ主として奴隷の食料となっていた。

この儲かる王室独占事業も英米の捕鯨船がフォークランド諸島沖に進出して乱獲を始めるやたちまち捕獲頭数が減り、ポルトガル本国は保持する意味のなくなった独占権を放棄することとなる。先に引用したC・プラドが記述している如く、民間に開放された捕鯨は細々と継続されたが1830年には終焉を迎える。こうして二百年以上続けられた家内工業的捕鯨は消滅したが、サンタカタリーナにはかつての捕鯨場跡が

今日でも残されている。

．ブラジルにおける近代捕鯨

南米大陸最東端に近いパライーバ州ルセナ郡コスチーニャに捕鯨基地をおくCOPESBRA社（Companhia de Pesca Norte do Brasil - 北伯漁業（株））が1911年12月、ノルウェー人フォン・シヨステンスによって設立された。コスチーニャは鯨の回遊ルートに近いという点では立地条件に恵まれているが、その他の社会基盤やインフラの面では全く未整備の寒村であった。件のノルウェー人は近代捕鯨を地元資本家メンデス・リマとの共同事業として始めたわけであるが、何故この様な僻地を選択したか、その辺の事情は資料がないためよくわからない。

COPESBRA社設立の目的はかつてのオランダや英国の捕鯨と同じく鯨油の生産であり、鯨種としてはザトウとイワシを捕獲していた。矢張り資料がないため正確な年は不明であるが、1930年ごろ経営権が地元のサムエルガルバン・グループに移され事業は継続されたものの、50年代に入って思わしくない経営状態が続いていた。

売却先を探していた債権者代表のブラジル銀行は、当時パライーバ州の南隣ペルナンブーコ州の州都レシーフェにてマグロ漁業を漁労から凍結、冷蔵、缶詰・練製品製造まで一貫事業として本格的に展開していた日本冷蔵（株）現（株）ニチレイの現地法人INBRAPE社へこの話を持ち込んだ。検討の結果INBRAPE社はCOPESBRA社を買収することを決定した。1958年1月のことである。

買収時COPESBRA社はノルウェー建造の120トン級蒸気捕鯨船2隻（船名：BELMONTEとCABO BRANCO）を保有していた。いずれも砲手を含む乗組員全員が伯人であったが、老朽船のため実質的に1隻操業状態であった。1958年の捕獲数はイワシ鯨118、マッコウ鯨4、ザトウ鯨5、ミンク鯨1、合計128頭でしかなかった。

このように捕獲頭数の90%以上をイワシ鯨が占め、残りの数パーセントがザトウ鯨、マッコウ鯨となっており、ミンク鯨は捕鯨の対象では

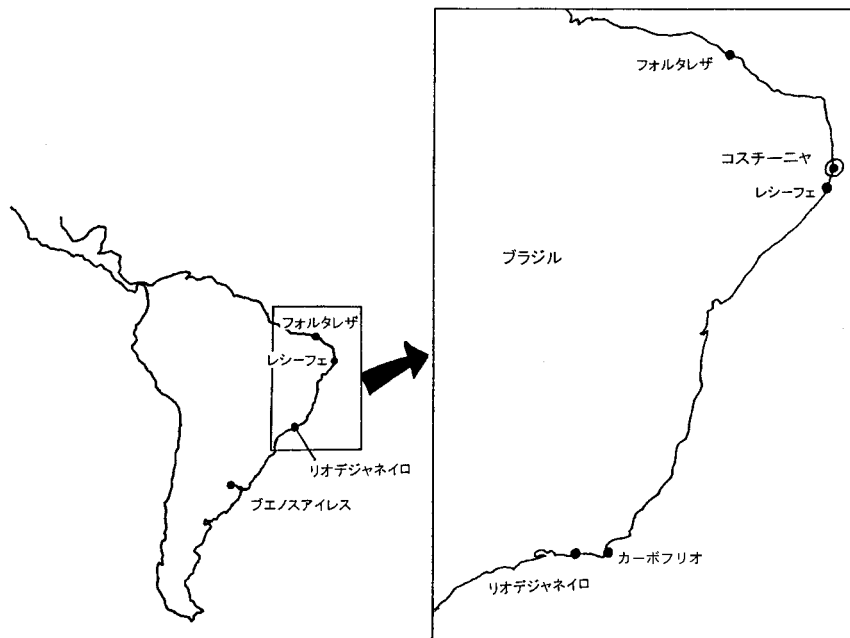


図1 . COPEBTRA社の捕鯨基地があったコステーニャ

なかった。鯨体利用についてみれば、一部生鮮肉の地元売りやクジラヒゲの欧州向け輸出があったとはいえ、鯨油が唯一の生産物であった。骨、皮、肉・臓物の3部位に分けて高圧釜で採油していたが、残滓は商品として検討することもなく工場裏に投棄され、ポタ山ならぬ鯨滓山が野晒しで放置されていた。精製ヒゲ鯨油は主として南伯の皮革会社に、マッコウ鯨油は化学薬品会社に出荷されていた。

COPEBTRA社の買収を機に、ニチレイはINBRAPE社の鮪・イセエビ等の漁労部門をCOPEBTRA社に集約するとともに捕鯨事業の健全化に傾注した。

また、ほぼ同時期に大洋漁業(株)現(株)マル八)がリオデジャネイロから東へ約100kmのところ位置するカーボフリオを基地とする捕鯨事業を開始している。ブラジルの捕鯨は新たな局面に入ったといえよう。

・新生COPEBTRA社の捕鯨事業

1) 開発・事業確立段階

捕鯨部門の黒字化を実現すべく、COPEBTRA新経営陣が取り組んだのは、捕獲頭数の増加

日本式鯨体解剖ノウハウの導入 - 解体時間の短縮、採肉歩留りの向上 鯨油の品質改善 鯨肉の完全利用 骨その他高圧釜残滓の商品化、といった課題であった。なかでも鯨肉の完全利用はCOPEBTRA社の浮沈にかかわる最重要課題と位置付けられ、“釜には肉片を一片たりとも入れない”精神でチャレンジした。捕獲の改善のためには、買収の翌年1959年に日本から捕鯨船を2隻導入した。到着が漁期半ばであったため、前半使用した既存船を廃船とし、後半からは2隻操業体制とした。この結果、58年の捕獲頭数128頭は、59年には2倍以上の315頭(イワシ鯨294、ザトウ鯨8、マッコウ鯨11、ミンク鯨2)となり、60年は500頭を越す捕獲を挙げ得た。但し、国内需要が左程大きくない市場でこの頭数から採取される鯨油を売り捌くことは難しく、輸出も八方塞がりという事情から却って経営を圧迫するとの判断を下し、2隻操業は3年で打ち切り、62年以降は1隻に減船した。(捕鯨船の操業については後述する。)

日本から輸入した捕鯨船に便乗させて10名程の解剖員を呼び寄せ、現地人解剖員に日本式鯨体解剖を教え込んだ。解体時間の短縮による各製品の品質向上が当面の目的であったが、次のステップ＝鯨体完全利用への布石でもあった。2隻から1隻操業への減船に伴い日本人解剖員数は半分に減員し、さらに2年後は2名を置くだけとなった。ブラジル人解剖員数は約30名、彼等は解剖ノウハウを短期間に吸収し解体作業の迅速さでも採肉歩留りにおいても日本人解剖員に比して何ら遜色ない技量を習得していた。

工場裏に廃棄され野晒しとなっていた骨などの積年の高圧釜残滓は蠅の巣窟となり衛生上も問題となっていたが、対策を検討した結果、当時対米輸出が景況で“黒いダイヤ”といわれていた胡椒の栽培肥料として販売出来ることとなった。アマゾン地方パラ州の有力日系農協であるトメアス協同組合と成約出来たことで、10年越しの難題が解決されることとなった。その後は各漁期の残滓は即時骨粉（肥料）、肉粉（飼料）に加工され販売されたので、工場内外は蠅一匹いない環境へと一変したのである。

緊急にして最重点の経営課題は、鯨肉をどのような形で地元住民に普及させるか、であった。熱帯サバンナ気候における長期保存食としては、肉であれ水産物であれ塩干品が長年にわたって受け入れられていたが、その中でもシャルケと呼ばれる牛肉の塩干品がブラジル人が最も嗜好する食材として全土で流通していた。このシャルケの鯨肉バージョンというイメージから製品の開発に入った。まず技術者を牧畜の盛んな南伯のサンパウロ州リベロン・プレトとリオグランデ・ド・スール州バジェの2工場に出張させ、シャルケの製法を学ばせた。牛肉シャルケの製法を土台に鯨肉の特性を加味して工夫を加え、1961年に鯨肉シャルケの生産が始まった。初年度の61年はイワシ鯨504頭を捕獲した年でもあり、シャルケ向けの採肉率は低かったが、翌年度の1隻操業になってからは地元売り生鮮肉を除く全量がシャルケに供された。

製造についても試行錯誤が続けられたが、販路の開拓はより難事であった。“東北伯の低所得者層に廉価にして良質の蛋白源を供給する”

ことが販売戦略の機軸となり、価格については牛肉シャルケの半額を目処とすることを基本方針とした。以前より付き合いのあったパイアバ州州都ジョアンペッソア市の大手食品卸売業者L氏が鯨シャルケの試作品を手にして、「これはいける」と太鼓判を押したうえに製品全量引取りの約束をしてくれたことから、楽観モードの中で製品の出荷が始まった。ところが現実には厳しかった。牛肉シャルケの流通ルートに便乗して難なく捌けるという安易な期待に反し、当初の出足は芳しくはなかった。次の漁期が始まるまでに在庫が片付くか懸念される事態となったため、シャルケ開発の技術者自身が販売も手がけ東北伯各地を飛び回ることとなった。鯨肉を全く知らない問屋・業者に対し、まず鯨の生態とか捕鯨船の操業振りなどから話に入り、先方の関心を引き寄せながら鯨肉が牛肉に優るとも劣らぬ高栄養価の蛋白食品であることを力説した。こうした努力にも拘らず、市場の反応にはぶく、焦燥を覚え始めた頃、ようやくパイア州の問屋からある程度まとまった量の注文が舞い込んだ。この注文が呼び水となって同州に一つの動きが出てきた。これに刺激され、L氏もそれまで手付かずであったパイア州で積極的に販売活動を展開するようになり、漸く順調な荷動きとなった。結果的には翌漁期に繰り越すことなく完売、関係者一同胸をなでおろした次第だった。

この様な初期の販促活動が実を結び、鯨肉シャルケは東北伯低所得者層の圧倒的支持を得ることとなり、彼等の生活必需品となっていく。販売が落ち着けば、COPESBRA社捕鯨事業の業績も安定することとなる。出荷先はパイア州が5割以上を占め、ペルナンブーコ州、パイアバ州がこれに次いだ。このシャルケ需要者層の評価・支持が捕鯨継続にも大きな影響を与えることとなる。

一方、カーボフリオを基地とする伯国大洋の方がコステニヤ工場を訪問され、鯨肉シャルケの製造現場を見学・視察されたこともあったが、サンパウロなど南伯での鯨肉販売に難渋された由だ。（この捕鯨は1960年から4年間続いたが、漁場が遠く漁労コストが割高であったことや鯨肉の鮮度維持が難しかったことから、経

表1. ブラジル沿岸での年別・鯨種別捕獲頭数(1910~1985)

年	マッコウ クジラ	シロナガス クジラ	ニタリ クジラ	イソクジラ	ナガスクジラ	ミンククジラ	ザトウクジラ	合計
1910	1910年 捕獲記録無し							
1911							102	102
1912							342	342
1913							352	352
1914							317	317
1915 1923	1915~1923年 捕獲一時停止、基地の休業							
1924							62	62
1925							42	42
1926							32	32
1927							47	47
1928							40	40
1929 1930 1946	1929~1946年 捕獲記録無し							
1947				14			11	25
1948		1		10			21	32
1949				18		1	15	34
1950				98			24	122
1951				151			28	179
1952	1			153			9	163
1953	1			161			8	170
1954	1			183			18	202
1955	1			198			6	205
1956	3			196	1		14	214
1957	2			115				117
1958	4			118	1		5	128
1959	11			294		2	8	315
1960	1/28			500/250	/21		10/3	511/302
1961	5/97			504/453	/10		11/2	520/562
1962	4/81	/1		272/338	/49		8/3	284/472
1963	7/35			253/93	/4	2	10/2	272/134
1964	4			256		44		304
1965	13			149		68		230
1966	24			72		352		448
1967	20		6	49		488		563
1968	39		6	58		456		559
1969	75		6	56		617		754
1970	76		3	23		701		803
1971	55		2	18		900		975
1972	66			5	1	702		774
1973	75		1	6		650		732
1974	29		1	2		765		797
1975	54			3		1039		1096
1976	9			3		776		788
1977	25			5		1000		1030
1978	24					690		714
1979	27					739		766
1980	30					902		932
1981						749		749
1982						854		854
1983						625		625
1984						600		600
1985						598		598
合計	686/241	1/1		3943/1134	3/84		1542/10	20520/1470
	927	2	25	5077	87	14320	1552	21990

※表中のスラッシュの左右に示された捕獲数： コスチーニャ捕獲数/カーボフリオ捕獲数

※「Revision of Brazilian Whaling Data」(Jesuina Maria da Rocha)、「A Review of Brazilian Whaling : Aspects of Biology, Exploitation and Utilization」(K.V.Singarajah) 掲載の表を参考に作成。

営的に苦勞され63年の漁期をもって閉鎖したと聞く。)

2) 転換期

60年代後半になって南氷洋における捕鯨対象種がシロナガス鯨、ナガス鯨中心からナガス鯨、イワシ鯨へとシフトしていくに伴い、ブラジル沖のザトウ鯨、イワシ鯨の回遊数が顕著に減少してきた。このため1965年を境にしてイワシ鯨の捕獲が激減した。別表の通り、10年後の75年の捕獲は僅か3頭という急激な落込みである。この現実に対処すべく捕獲の対象鯨種を必然的にミンク鯨主体に移行し、同じ75年には1039頭の捕獲を記録した。ブラジル沖に回遊するイワシ鯨のこのような極端な減少はそれまで処女海区とされていた海区、特にフォークランド諸島沖やサウスジョージア島近海での母船式捕鯨によるものとブラジルはみた。母船式捕鯨がその捕獲対象をミンク鯨にまで広げたため、ミンク鯨についてもイワシ鯨と同様の事態に陥る恐れがあると深刻にとらえたブラジル政府は、国際的な場で主張してブラジル捕鯨の權益・国益を守るべしとして1973年12月IWCに再加盟し、翌74年のロンドン会議から政府代表を派遣した。ブラジルは自国の沿岸捕鯨が沖合いを北上回遊するイワシ鯨の資源に影響を与えるほどのものではないという見解に基づき、ブラジルの無枠捕鯨の継続を主張したが、結局はIWCの決議に従い76年から枠捕鯨に移行した。

こうしてIWCが認める限りブラジルは捕鯨を継続するという政府方針が確立されたが、それとは裏腹に70年代に入り捕鯨反対グループの様々な嫌がらせやマスメディアの反捕鯨論調が年々顕著になってきた。また、一方では財閥系企業が捕鯨事業に新規参入する動きを見せ、IWC会議にも政府代表の随員として出席するなど政府に意欲的に働きかけていたが、75、6年頃この動きは立ち消えた。伯国大洋もカーボフリオ基地の再開が取り沙汰されたが、これまた具体化とはならなかった。70年代は転換期であり、波乱含みの10年であった。

収益率と鯨体利用度の向上を目指して、次に企画したのが冷凍鯨製品の対日輸出であり75年に実現に漕ぎ着けた。当時コスターニャ工場に

は冷凍・冷蔵設備がなかったため、初年度と二年度は対岸の水産加工工場に凍結並びに船積みまでの冷蔵保管を委託した。残念ながら、この委託に起因する品質上の不手際が発生してしまった。担当者が日本出張し原因の究明を行なったが、この貴重な経験を踏まえ品質的に問題のない冷凍鯨製品生産体制を急ぎ確立した。自前の凍結装置と冷蔵庫が完成した77年から日本向け輸出は本格化していく。76年から80年までの5年間の輸出量(生産量ベース)推移は、76年65トン(白手物65、赤肉0)、77年442トン(白手物119/赤肉323)、78年837トン(178/659)、79年850トン(190/660)、80年911トン(235/676)、81年987トン(260/727)となっている。

また、鯨肉シャルケについても変化が起きた。工場出荷から内陸購買者の手に渡るまでの常流通期間が比較的長期間のため、鯨肉シャルケは鮮肉歩留り平均48%に仕上がっている。日持ちを犠牲にしても、もっと乾燥度が低く、それだけ肉のうまみの濃い塩蔵加工品を求める声が地元パラíba州で聞かれるようになり、この要望に応える形で肉片を小さくした鮮肉歩留り62%の「一日干し」と命名する新製品が誕生した。試作を74年に始め、76年に満足出来る製品が出来上がった。圧縮機、真空パック機、梱包の検討を経て78年から本格的な生産を開始した。この年以降はシャルケの生産量を減らす一方で「一日干し」を増やしていった。80年にはシャルケ653トンに対し「一日干し」903トンとその生産比率が逆転した。かくして83年に83トン生産したのを最後にシャルケの生産は打ち切りとなった。日本向けを優先した採肉のあり方を一層進めた結果国内向け赤肉は必然的に小片が多くなり、それが「一日干し」への傾斜に拍車をかけたともいえよう。鯨肉の輸出増はその相当する量のシャルケの供給減を意味するわけであり、初期のシャルケ開発に携わったパイオニアの人たちにとっては、鯨肉シャルケを愛好しCOPEBIRA社捕鯨事業を支えてくれた東北伯の往年の顧客に思いを馳せるとき、対日輸出の増大にはある種の慙愧の念が横切ることになるが、やむを得ない選択であった。多くの関係者に実に複雑な想いを残して、シャルケはその表舞台から退場したのである。

3) 捕鯨禁止

1985年9月、Gastone Righi法案と呼ばれた、捕鯨禁止法案(No.124/85)がブラジル下院で可決された。同年12月、1982年のIWCの場で可決されたモトリアムを受けて、86年から5年間商業捕鯨を禁止する大統領令がサルネイ大統領(当時)によってサインされた。これにて商業捕鯨の禁止が確定したが、この時点では調査捕鯨の可能性はまだ残されていた。この調査捕鯨は地元社会や政界の支持も得られていたので、その可能性を追求すべく様々な努力・検討が続けられた。しかしながら、結局87年12月この捕鯨禁止法案が上院でも可決され、法律No.7643として発効した。こうして商業捕鯨ばかりか調査捕鯨も含めあらゆる形態の捕鯨がブラジル領海では禁止となってしまった。ここに至るまでの経緯をごく簡単にメモしておきたい。

国際的な潮流に沿って70年代後半から顕在化してきたブラジルにおける反捕鯨運動の影響がマスメディアの論調にもはっきり現れるようになり、欧米における反捕鯨記事と同じような感情的タイトルが繰り返し紙面を賑わすようになる。「可哀想な鯨を救え」、「知能水準の高い鯨の虐殺を止めろ」、「エコロジーへの犯罪である捕鯨を即時停止せよ」といったタイトルの記事、社説が再生産され、テレビでも様々な反捕鯨番組が放送されたのである。一方、ブラジル捕鯨の現実を冷静に見つめた記事も地元新聞を中心に掲載されたが、あくまでも少数派でしかなかった。また、テレビでも捕鯨賛成・反対両論を客観的に報道したマンシェッチTVのレポーター番組などもあったが、これまた例外でしかなかった。

こうした反捕鯨“世論”が立法府や行政府をも動かす始める。76年9月に沿岸捕鯨の禁止を求めるNelson Carneiro法案が提出される(上院では可決されたが、下院では否決されたため81年10月廃案)。79年7月、「ブラジル領海内の捕鯨を1981年1月1日より禁止する」との漁業開発庁長官令が発令されたが、パラíba州をはじめとする官民あげての抗議運動の結果、80

年12月の新長官令により「捕鯨禁止を決定した長官令の発効を中止」となった。こうして85年まで捕鯨は続けられることになったが、82年のIWC本会議における「86年からの商業捕鯨中止」決議を追認するかたちで上述の捕鯨禁止法案が可決されたのである。

そうしたなかで、1981年5月29日付けでFAO(国連食糧農業機構)のローマ本部漁業局からパラíba州に届いた手紙は実に興味深い。これはパラíba州工業労働連盟からの陳情書への返書であったが、さわりの部分をここに引用しておこう。

「FAOは東北伯がかかえる諸々の困難な条件、そして、仮に捕鯨が禁止された場合に起きるであろう危機的状況に、重大な関心を寄せております。」

「FAOは、かつて乱獲に反対した時と同様の強い信念をもって、鯨資源が明らかに充分である時は、捕鯨によって合理的利用がはかられるべきだとの認識をもっております。」

「我々は鯨の資源問題を直接担当する科学者たちの意見も求めてみましたが、東北伯で捕獲されるミンク鯨は南極の鯨資源の一つで、南極海の冬期にブラジル沖まで回遊してくる移住性の群れだが、その資源は全く健全な状態にあると科学者たちはFAOの我々に保証しております。」

ブラジル沖の捕鯨のように、ごく控え目な資源の利用すら行なってはいけないと言う生物学的理由はいささかもないし、まして捕鯨を禁止せねばならない理由など全くないといえます。(以下略)

捕鯨に携わっている者には常識であることをFAOという国連機関が公認したかたちとなったので、この文書のインパクトは小さくはなかった。7月にはレシーフェ市の有力新聞Jornal do Comercioが「このFAOの主張に耳を傾けよう」という趣旨の社説を掲げたのである。少数派の意見ではあったが、こうした冷静な論調も存在したことを書き留めておきたい。

日本鯨類研究所関連トピックス (2002年9月～2002年11月)

2002年JARPN の終了

本年から開始された第2期北西太平洋鯨類捕獲調査(JARPN)の本格調査は、6月29日に出港した日新丸調査船団による調査が9月18日に、並びに9月10日から開始された小型捕鯨船による沿岸域(釧路)調査が10月12日に終了したことで、2002年度の調査を完了した。

本件調査では、沖合域でミンククジラ、ニタリクジラ、イワシクジラ及びマッコウクジラが、沿岸域ではミンククジラが調査対象種として捕獲された。3種のヒゲクジラの胃内容物からは多量のカタクチイワシ、サンマ、スルメイカといった重要漁業対象種が、マッコウクジラの胃からは深海性イカ類の他に表層性で漁業対象種のアカイカも発見された。捕獲調査と併行して実施したトロール調査船による餌生物調査の結果を合わせた分析により、鯨類と漁業との強い競合関係を示す科学情報が多量に得られた。

当研究所評議員会・理事会の開催

9月17日当研究所会議室において、評議員会並びに理事会が開催され、平成14年度の事業計画と収支予算及び平成14年度における特別基金財産の処分方法の件等が審議され、原案通り承認された。

第41回水産資源管理談話会の開催

当研究所資源管理研究センターが主催する標記会合が、9月20日午後当研究所会議室において41名の参加の下で開催された。今回は京都大学博物館の中坊徹次氏が「系統群あれこれ」、東北区水産研究所の斉藤憲治氏が「遺伝距離と系統推定」、遠洋水産研究所の張成年氏が「まぐろ・かじき類の系統判別」と題する話題を提供し、各話題について質疑応答が行われた。

SOWER計画会議の開催

9月24日から27日までの4日間、当研究所会議室において2002/2003年度SOWER計画会議が開催された。本調査の計画立案を担当するバ

ニスター元IWC科学委員会議長をはじめとした海外の科学者5名のほか、国内から20名の関係者が出席した。

本年度の調査は豪州ホバートを基地にして2002年12月24日から翌年3月3日までの76日間にロス海を含むその周辺海域でクロミンククジラを対象とした調査を行うことになった。

IWC特別会合とRMS作業部会

10月14日から17日、ケンブリッジにおいて39カ国の代表が参加したIWC特別会合が開催された。下関会議で否決されたホッキョククジラの先住民捕鯨による捕獲割当量が米・口の提案通りコンセンサスで決まった。次いで開催されたRMS作業部会に当研究所から2名の職員が参加した。

伝統捕鯨地域サミット検討会の開催

10月31日当研究所において伝統捕鯨地域サミット検討会が開催された。各地域から集まった20名の関係者とともに、来年5月に長崎県生月町で予定されている第2回のサミットで取り上げるべき課題等が検討された。

当研究所の創立記念日

当研究所は10月30日に第15回の創立記念日を迎え、会議室において恒例により大隅理事長の訓辞の後、十年勤続者(バステネ研究部長代理、本村課長、松岡調査室長)を表彰し、赤飯で祝った。

CITES COP12

11月3日から15日までサンチャゴ(チリ)においてワシントン条約(CITES)第12回締約国会議が開催され、当研究所から村上専務理事他3名が参加した。我が国が提案したミンククジラとニタリクジラのダウンリスティングは今回も見送られた。

第16次南極海鯨類捕獲調査船団の出港

11月8日、第16次南極海鯨類捕獲調査船団の出港式が下関市の「あるかぼーと岸壁」で盛大に行われた。調査母船・日新丸、目視専門船・第2共新丸、そして新造の第2勇新丸、勇新丸、第1京丸の3隻の目視採集船は、園児・児童100名を含む500余名が見送る中を南極海の調査海域に向けて出港した。

大隅理事長、勲四等瑞宝章を受章

平成14年秋の叙勲において、大隅理事長が勲四等瑞宝章を受章した。

9北調査副産物販売勉強会

11月14日当研究所会議室で9北調査副産物販売勉強会が開催された。26年振りとなるイワシクジラ副産物、並びに生産工程が異なる沿岸域調査でのミンククジラ副産物の取り扱い方に関心が集まった。

SOWER調査船出港

国際捕鯨委員会（IWC）が実施する南大洋鯨類生態調査（SOWER）に参加する目視調査船・昭南丸及び第2昭南丸は、調査基地となるホバートに向けて11月25日広島県瀬戸田港を出港した。当該調査には日本の他にアメリカ、メキシコ及びニュージーランドから合計8名の国際調査員が従事することになっている。

当研究所評議員会・理事会の開催

11月29日当研究所会議室において、評議員会・理事会が開催され、平成13年度事業報告並びに収支決算が承認された。また本年度は、評議員・理事の改選年に当たるため、評議員会では新理事を、理事会においては新評議員を選出した。尚、その席上、理事長より田中昌一顧問が11月29日付けで退任され、名誉顧問となった旨の報告があった。

日本鯨類研究所関連出版物等 (2002年9月～2002年11月)

[印刷物]

当研究所：鯨研通信 415.38pp. 日本鯨類研究所, 2002/9.

当研究所：鯨研叢書 No.9 海産哺乳類の調査と評価 Marine Mammal Survey and Assessment Methods. 169pp. 日本鯨類研究所, 2002/9/6.

当研究所：What's CITES? (日本語版). 日本鯨類研究所, 2002/10.

当研究所：水産資源管理談話会報 28.29pp. 日本鯨類研究所, 2002/11.

当研究所：(新聞広告) 増えるクジラ、減るサカナ。水産タイムス, 2002/11/18.

当研究所：(新聞広告) 増えるクジラ、減るサカナ。みなと新聞, 2002/11/22.

Cui, G., Punt, A. E., Pastene, L. A., and Goto, M. : Bayes and Empirical Bayes approaches to addressing stock structure questions using mtDNA data, with an illustrative application to North Pacific minke whales. *J.CETACEAN RES. MANAGE.* 4(2) : 123-134, 2002.

藤瀬良弘・後藤睦夫：日本国内における鯨製品の流通の実態について 捕獲統計と市場調査から 鯨研通信415 : 1-18, 2002/9.

Goodman, D. : Whale research . Media Search, 2002/9/2.

村上光由：ご挨拶．鯨友会会報 39 : 14-18 .

大隅清治：極洋丸北洋捕鯨船団によるセミクジラの特別捕獲調査に参加して．くじらの海とともに - 極洋のくじらとり達の物語 - : 110-114, 2002/10/10.

大隅清治：鯨の座礁について考える．Ship & Ocean Newsletter 53 : 6-7, 2002/10/20.

大隅清治：出港にあたって 合理的利用と管理に貢献（財）日本鯨類研究所理事長 大隅清治氏：水産タイムス 2002/11/18.

大隅清治：第二勇新丸の洋々たる前途を祝す．水産世界 51(11)：55, 2002/11/15.

田中昌一：21世紀の水産資源管理を考える．海洋水産エンジニアリング 2(14)：9-16, 2002/10/10.

矢吹崇・須賀利雄・花輪公雄・渡邊朝生・松岡耕二：南極海太平洋区・インド洋区の海洋構造 - JARPA観測資料から．2002年度日本海洋学会秋季大会 北海道大学（札幌キャンパス），2002/10/3.

[学会発表]

後藤睦夫・上田真久・Pastene, L. A.：日本周辺海域に回遊する ミンククジラの遺伝的系群構造．日本哺乳類学会 富山大学, 2002/10/5.

林 耕介・西田 伸・後藤睦夫・Pastene, L. A.・上田真久・小池裕子：MHC多型解析 - ミンククジラ類を例として - . 日本哺乳類学会 富山大学, 2002/10/5.

林 耕介・西田 伸・吉田英可・後藤睦夫・Pastene, L. A.・小池裕子：スナメリのMHC多型解析．東京大学海洋研究所共同利用シンポジウム「沿岸性小型鯨類スナメリの生態と保全」東京大学海洋研究所, 2002/11/8.

村西由紀・佐々木基樹・林憲悟・阿部憲人・藤平拓磨・石川創・大隅清治・宮本明夫・福井豊：南極海産ミンククジラ胎子卵巣内の前胎状卵胞の発現と胎子・臍帯・母体中性ホルモン濃度との関連性．第95回日本繁殖生物学会大会 岩手大学 盛岡, 2002/9/14.

渡部浩之・茂越敏弘・浅田正嗣・林憲悟・藤瀬良弘・石川創・大隅清治・宮本明夫・福井豊：北西太平洋産ヒゲクジラ類の血清中ホルモン（T、E2、FSH、LH）濃度と精細管内組織像の関連性．第95回日本繁殖生物学会大会 岩手大学 盛岡, 2002/9/14.

渡邊直人・佐々木基樹・石川創・茂越敏弘・大隅清治・手塚雅文・宮本明夫・福井豊・北村延夫・山田純三：ミンククジラ（*Balaenoptera bonaerensis*）精巣の分化に関する免疫組織化学的研究．第8回日本野生動物医学会大会 フォレストパークあだたら、福島, 2002/9/7.

矢吹崇、須賀利雄、花輪公雄、渡邊朝生、松岡耕二：南極海太平洋区・インド洋区の海洋構造 - JARPA観測資料から - . 2002年度日本海洋学会秋季大会 北海道大学（札幌キャンパス），2002/10/3.

[放送・講演]

石川 創：いま鯨の世界で起きていること．海・船セミナー2002 企画展 鯨の世界をのぞく．船の科学館, 2002/11/17.

西脇茂利：鯨のこともっと知ってみませんか．海・船セミナー2002 企画展 鯨の世界をのぞく．船の科学館, 2002/9/29.

大曲佳世：世界での鯨類資源の利用状況．平成14年度第1回日本水産学会水産利用懇談会講演会 日本大学湘南校舎, 2002/11/8.

大隅清治：IWCと捕鯨の将来を予測する．21世紀の水産を考える会緊急フォーラム 南青山会館, 2002/9/14.

大隅清治：定期総会挨拶．因島市日立労働会館 鯨友会, 2002/10/20.

大隅清治：（インタビュー）きょうは何の日「鯨博士・奈須敬二が亡くなった日」．おもいっきりテレビ．日本テレビ, 2002/10/29.

田中昌一：イワシ・銀ムツの警告 - 大衆魚が「高級魚」海に何が... サンデーモーニング．TBS, 2002/11/24.

山村和夫：鯨のからだ．山田町立鯨と海の科学館「鯨と海の絵画コンテスト」表彰式・講演会, 2002/11/10.

[新聞記事] (日鯨研所蔵記事ファイルより抜粋)

- ・ 釧路沖で鯨類捕獲調査 沿岸漁業への影響科学的に 初日4頭に関係者驚き 胃の中からカタクチイワシも：釧路新聞 2002/9/11.
- ・ イワシ鯨39頭捕獲 第2期北西太平洋鯨類調査船団が帰港：水産タイムス 2002/9/30.
- ・ JARPN サンマやイワシを大量補食 鯨捕獲調査 沿岸域も終了：みなと新聞 2002/10/17.
- ・ 日本鯨類研究所が記者会見 釧路沖は鯨の餌場：釧路新聞 2002/10/17.
- ・ 「釧路沿岸のクジラ発見は予想の2倍」日本鯨類研究所が調査：読売新聞 2002/10/18.
- ・ 北西太平洋調査、クジラの餌料大食い明らかに：新水産新聞(速報版) 2002/10/21.
- ・ 大隅日鯨研理事長が瑞四 秋の叙勲：水産タイムス 2002/11/4.
- ・ 日新丸など下関出港 第16次南氷洋鯨類捕獲調査 関係者、市民700人が見送り：日刊水産経済新聞 2002/11/11.
- ・ 秋の勲章伝達式 水産関係では16人が受章の栄 大隅氏に勲四：日刊食料新聞 2002/11/12.
- ・ ミンク鯨とニタリ鯨のダウンリスティングは否決=CITES：新水産新聞(速報版) 2002/11/14.
- ・ IWC正常化など要望 捕鯨を守る会など7団体 大島新大臣に：日刊水産経済新聞 2002/11/15.
- ・ 晴れやかに叙勲褒章伝達式：水産タイムス 2002/11/18.
- ・ 第16次南氷洋鯨類捕獲調査船団が下関を出港：水産タイムス 2002/11/18.
- ・ IWCの南大洋鯨類生態調査へ調査船2隻が出港：新水産新聞(速報版) 2002/11/25.

[雑誌記事] (日鯨研所蔵記事ファイルより抜粋)

- ・ 第15次南氷洋鯨類捕獲調査副産物の販売：水産界 2002/9.
- ・ 北西太平洋の鯨類による摂餌生態の解明など サンマ、イカなど漁業資源の適切な管理を！：水産世界 2002/9.
- ・ 第二期北西太平洋鯨類捕獲調査終了 クジラの分布・植生の解明に対応：水産世界2002/10.
- ・ 21世紀の水産を考える会フォーラム とるべきはIWC正常化 クジラ問題で大隅日鯨研理事長：水産週報 2002/10/5.

京きな魚(編集後記)

大隅理事長が9月21日より13日間、極東ロシアのチュコト地方に出張してきました。高齢と言うことで心配する方もおられましたがお元気に戻って来ました。天候や交通事情のみならず食事内容も相当限定されていた様子ですが、使節団の中で最も適応していたのは当の大隅さんであったようです。

ブラジルでの捕鯨が中断されて久しくなりましたが、その実態を知る人が少なくなっていることから、御無理を言ってお二チレイの関係者に執筆をお願いしました。大変貴重な資料になると確信しておりますが、残念ながら誌面の都合で2回に分割して掲載せざるを得なくなりました。ご了承ください。

9年振りの日本でのIWC総会の開催、本格的JARPN 計画の開始に伴う調査の拡大、新造採集船第2勇新丸の就航、そしてミンククジラとニタリクジラのダウンリスティングを求めた第12回ワシントン条約会議(チリ)の開催等、当研究所の役職員にとっては多忙な1年となりました。そうした中で当研究所は新生なって15才の誕生日(10/30)を迎えました。やっと元服かと言われるかもしれませんが、若き故に時間に追われてする仕事さえも血や肉にして成長することが出来ると信じ頑張っております。新しい年もご支援とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。よいお年をお迎えください。(山村和夫)

ストランディングレコード (2002年9月～11月受付)

登録番号	和名	群	性別	年齢	都道府県	位置	西暦年月	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	備考
P-154	ウツクサ	B	1	1	北海道	茅部郡南茅部町白尻	19840420	混獲(定置網)	生存→飼育			成田秀春	青森県宮城虫水族館		遼虫水族館が保護。870710死亡。
P-155	ウツクサ	B	1	1	青森	三沢市遇奎	19840425	漂着	生存→飼育	0.77	幼獣	成田秀春	青森県宮城虫水族館		遼虫水族館が保護。841112死亡。体長は文献(104)による。DP-141を番号変更(020826)。
P-156	ウツクサ	B	1	1	青森	三沢市越笠	19840502	漂着	生存→飼育	0.65	幼獣	成田秀春	青森県宮城虫水族館		体長体重は文献(104)による。遼虫水族館が保護。861023死亡。DP-145を番号変更(020826)。
P-157	ウツクサ	B	1	1	青森	下北郡東通村老郎	19840504	漂着	生存→飼育		幼獣	成田秀春	青森県宮城虫水族館		遼虫水族館が保護。860519死亡。D
P-158	ウツクサ	B	1	1	青森	上北郡六ヶ所村泊	19840506	漂着	生存→飼育		幼獣	成田秀春	青森県宮城虫水族館		P-146を番号変更(020826)。
P-159	ウツクサ	B	1	1	岩手	釜石市	19840508	漂着	生存→飼育		幼獣	成田秀春	青森県宮城虫水族館		遼虫水族館が保護。870730死亡。D
P-166	ウツクサ	A	1	1	青森	八戸市八戸港運船所	19841208	漂着	生存→飼育	0.84	推定寄礁。左後肢に怪我。	成田秀春	青森県宮城虫水族館		P-030を番号変更(020904)。
P-143	ウツクサ	B	1	1	青森	下北郡東通村尻尻	19850112	混獲(定置網)	生存→放流			成田秀春	青森県宮城虫水族館		P-032を番号変更(020825)。
P-144	ウツクサ	B	1	1	青森	三戸郡隠上町	19850226	混獲(定置網)	生存→飼育			成田秀春	青森県宮城虫水族館		
P-145	ウツクサ	B	1	1	青森	上北郡六ヶ所村泊	19850228	混獲(定置網)	生存			成田秀春	青森県宮城虫水族館		
P-160	ウツクサ	B	1	1	北海道	択捉島沖	19850403	混獲(DP-H漁)	生存→飼育		推定1-2歳。	成田秀春	青森県宮城虫水族館		DP-H漁船が混獲個体を八戸港に持ち帰った。遼虫水族館が保護。860814死亡。
P-129	ウツクサ	B	1	1	青森	下北郡大畑町(津軽海峡)	19850423	混獲(定置網)	生存→飼育			成田秀春	青森県宮城虫水族館		遼虫水族館が保護。881120男鹿水族館に搬出。RP-033を番号変更(020824)。
P-161	ウツクサ	B	1	1	北海道	茅部郡南茅部町白尻	19850508	混獲(定置網)	生存→飼育		換毛初	成田秀春	青森県宮城虫水族館		遼虫水族館が0510保護。880215死亡。RP-031を番号変更(020904)。
P-146	ウツクサ	B	1	1	青森	下北郡佐井村(津軽海峡)	19850515	混獲(特定)	生存→飼育		推定1歳。	成田秀春	青森県宮城虫水族館		遼虫水族館が一時保護。
P-167	ウツクサ	B	1	1	青森	三沢市遇奎	19851204	漂着	生存→飼育		幼獣	成田秀春	青森県宮城虫水族館		遼虫水族館が一時保護。
P-162	ウツクサ	B	1	1	青森	上北郡六ヶ所村泊	19860419	混獲(定置網)	生存→飼育	0.98		成田秀春	青森県宮城虫水族館		遼虫水族館が保護。860303伊豆三津ヶ尻に搬出。RP-068を番号変更(020910)。
P-163	ウツクサ	B	1	1	青森	上北郡六ヶ所村尾駱	19860420	混獲(定置網)	生存→飼育			成田秀春	青森県宮城虫水族館		遼虫水族館が保護。RP-082を番号変更(020910)。860520死亡。消化器内に多量の石が残留。状況、体重体長などは文献(229,104)による。
P-164	ウツクサ	B	1	1	青森	三沢市六川目	19860420	漂着	生存→飼育	0.95		成田秀春	青森県宮城虫水族館		遼虫水族館が保護。860512死亡。
P-130	ウツクサ	B	1	1	青森	下北郡佐井村牛滝(津軽海峡)	19860507	混獲(定置網)	生存→飼育			成田秀春	青森県宮城虫水族館		860421遼虫水族館が保護。880229死亡。DP-162を番号変更(020910)。
															遼虫水族館が保護。940531(津動物園)に搬出。RP-083を番号変更(020824)。

登録番号	和名	群	詳細	種	都道府	位置	西暦年月	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
P-131	3-777#75	B	1	1	青森	下北郡大畑町(津軽海峡)	19861228	混獲(竹定)	生存→飼育			成田秀春	青森県立昆虫水族館			浅虫水族館が保護。871215南知多ヒ-フットへ搬出。
P-134	3-777#75	A	1	1	北海道	茅渚郡南茅渚町(厚岸)	19870500	混獲(定地)	生存→飼育			成田秀春	青森県立昆虫水族館			870525浅虫水族館が保護。871109南知多ヒ-フットへ搬出。RP-067を番号変更(020824)。
P-132	3-777#75	A	1	1	青森	八戸市	19870506	混獲	生存→飼育			成田秀春	青森県立昆虫水族館			870507浅虫水族館が保護。900630大阪海遊館へ搬出。RP-066を番号変更(020824)。
P-133	3-777#75	B	1	1	青森	三沢市	19870522	混獲	生存→飼育			成田秀春	青森県立昆虫水族館			浅虫水族館が保護。871109南知多ヒ-フットへ搬出。
P-135	3-777#75	B	1	1	青森	下北郡大畑町(津軽海峡)	19880105	混獲(定置)	生存→飼育			成田秀春	青森県立昆虫水族館			浅虫水族館が保護。900630大阪海遊館へ搬出。
P-136	3-777#75	B	1	1	青森	下北郡大畑町(津軽海峡)	19880126	混獲(定置)	生存→飼育			成田秀春	青森県立昆虫水族館			浅虫水族館が保護。900630大阪海遊館へ搬出。
O-1288	3-777#75	C	1	1	北海道	松前郡松前町(津約16km)	19880430	混獲(深し)	死亡		死後約2日	石川剛	日本動物研究所	新聞情報(北海道881115)		日本動物研究所が保護。020820現在生存中。
P-137	3-777#75	B	1	1	青森	下北郡東通村(白根)	19880503	混獲(定置)	生存→飼育			成田秀春	青森県立昆虫水族館			浅虫水族館が保護。020820現在生存中。
P-151	3-777#75	A	1	1	青森	青森市(江ノ内)青森(津森)	19890228	港内進入(釣り上げ)	生存→飼育→放流	0.69	前腹、釣針で怪死。	成田秀春	青森県立昆虫水族館			又観(100)。浅虫水族館が保護。03後0509岩手県久慈沖で放流。RP-034を番号変更(020826)。
P-138	3-777#75	B	1	1	青森	西津軽郡深浦町(追良瀬川)	19890512	河川進入	生存		幼獣	成田秀春	青森県立昆虫水族館			浅虫水族館が保護。911126南知多ヒ-フットへ搬出。
P-168	3-777#75	B	1	1	青森	下北郡東通村	19900822	混獲	生存→飼育		幼獣	成田秀春	青森県立昆虫水族館			930618八戸市水産科学館(フット)から県営浅虫水族館に移動。020820現在生存中。RP-065から番号変更(020825)。
P-141	3-777#75	A	1	1	青森	八戸市(駅前)下松田(水産科学館前)	19930518	混獲	生存→飼育	0.80	前腹。推定生後11ヶ月。	成田秀春	青森県立昆虫水族館			浅虫水族館が保護。020826)。
P-152	3-777#75	B	1	1	青森	八戸市新井田川河口	19961219	混獲	生存→飼育		推定当歳。	成田秀春	青森県立昆虫水族館			解体後埋却。
O-1306	3-777#75	B	1	1	山口	豊浦郡豊浦町(大字川)	19970418	混獲	死亡		推定体長5m。	小林知吉	山口県水産研究所			第一発見者；池田栄治
O-1297	3-777#75	A	1	1	徳島	鳴門市北灘町(楠木)	20020409	混獲	死亡		腐敗。	佐藤陽一	徳島県立博物館			第二発見者；池田栄治
EX-072	3-777#75	A	30	1	富山	糸魚川市(北方)津約30km	20020703	目視情報	生存			山田祐	国立科学博物館			新聞情報(朝日/産経/新潟日報020705)
O-1289	3-777#75	A	1	1	北海道	十勝郡浦幌町(厚内)	20020823	混獲	死亡		体長約10m。	白川武士	富山県立木更木研究所			DNA標本(日録研)0日録研でDNAによる種判定(後継種未定)。
O-1286	3-777#75	A	1	1	北海道	根室市(落石)	20020831	混獲	死亡	17.70	腐敗。	佐田正蔵	根室市水産課			10:50AM定置網に漂着個体を発見。糸石港へ曳船後切断解体して市処分場に埋却。
O-1284	3-777#75	B	1	1	三重	三重郡熊野町(楠瀬)	20020902	混獲	死亡	1.91	腐敗。胃内に魚頭骨有り。	吉岡基石	三重大学生物資源学部			調査後埋却。
O-1287	3-777#75	B	1	1	宮崎	日向市(美々津町)	20020902	混獲	死亡	3.53	腐敗。	栗本幸	宮崎県東臼杵農業林業局			調査後埋却。
M-381F	3-777#75	A	1	1	富山	新湊市(堀岡)沖1.5km(富山湾)	20020903	混獲(7/定置網)	生存→死亡	4.20		梶谷晶之	新徳高薬局			DNA標本(日録研)

登録番号	和名	群	道	郡	市町村	位置	西暦年月	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考	
0-1285	シッコウ	B	1	三重	志摩郡桑洲町(伊勢湾)	一志郡桑洲町(伊勢湾)	20020904	漂着	死亡	1.54	腐敗、腹部膨満。	吉岡基一 山根人	三重大学 物理科学部 資源学教室 虫水検校		無し。	調査後埋却。	
0-1290	シッコウ	A	1	三重	三沢市六川目	三沢市六川目	20020904	漂着	生存→放流		体長約2.4m。衰弱。	水田光浩 永田光浩		第一発見者；中屋敷和夫		18:00頃発見。市役所及び八戸水産事務所職員らが粉砕船運するが再乗獲を繰り返した。翌0905浅虫水族館が浅虫漁港まで輸送し16:00放流、その後自力で遊泳した。	
M-382f	シッコウ	A	1	山口	長門市浦地先	長門市浦地先	20020908	漂着(7/7定置網)	死亡	3.90		内山満男	通定養海業組合		DNA標本(日鯨研)	20:00発見。地元消費。ICRY-02-078	
M-383f	シッコウ	A	1	福井	丹生郡越前町米ノ地先(若狭湾)	丹生郡越前町米ノ地先(若狭湾)	20020914	漂着(7/7定置網)	生存→死亡	5.00		吉田重幸	米ノ定置網組合		DNA標本(日鯨研)	網外へ出そうとするが死亡。留令に基づき販売。ICRY-02-079	
M-384f	シッコウ	A	1	長崎	壱岐郡基町箱崎地	壱岐郡基町箱崎地	20020915	漂着(小型定置網)	生存→死亡	4.30		川添隆	箱崎漁協 同組合		DNA標本(日鯨研)	9:00AM発見。地元消費。ICRY-02-080	
0-1291	シッコウ	B	1	鹿児島	鹿毛郡上屋久町宮之浦(奄美群島)	鹿毛郡上屋久町宮之浦(奄美群島)	20020918	漂着	死亡	2.30		久保直隆	かごしま水族館		無し	9:00AM発見。町営林水産課が調査後埋却。	
P-172	シッコウ	A	1	宮城	本吉郡歌津町伊理所川	本吉郡歌津町伊理所川	20020919	河川遊入	生存		体長約70cm。	石川剛	日本鯨鯨研究所	新聞情報(朝日020921)	無し	早朝発見。歌日間河口に漂着。愛称「ウちゃん」。	
0-1294	シッコウ	A	1	愛知	知多郡南知多町藤浜(伊勢湾)	知多郡南知多町藤浜(伊勢湾)	20020929	漂着(7/7流し網)	死亡	1.09		大池徳世 杉山重実 子安和弘 川田伸一郎	南知多ビーチランド(愛知学院大学南校区/名古屋大学)		第一発見者；石山紀生	南知多ビーチランドらが020930調査。	
M-386	シッコウ	A	1	北海道	林幸郡浜線別町字碓別	林幸郡浜線別町字碓別	20021002	漂着	死亡	4.50	腐敗。	斎藤幸紀	浜線町立林水産課		DNA標本(日鯨研)	10:00AM発見。前日は台風21号通過。1003海岸に漂却。他報告者：西谷泰治(利尻町立博物館)。北海道新聞021004。	
0-1292	シッコウ	A	1	北海道	幌加志えりも町字東洋(釧路地区)	幌加志えりも町字東洋(釧路地区)	20021003	漂着	死亡		体長約16m。腹内腐流。	石川博也	えりも町役場		DNA標本(えりも町立土質科館・日鯨研)	02年9月下旬より訓練中に漂着していた死体と同一の可能性有り。日鯨研でDNAによる種別判定(後藤謙夫)。他報告者：えりも町役場水産課(写真・標本も)。	
S-018	シッコウ	A	1	熊本	牛深市魚貴町赤島	牛深市魚貴町赤島	20021004	漂着(定置網)	生存→放流→死亡	2.60		吉岡基一	三重大学	共同通信(2→2速報021005)	全身冷凍(九州大)	7:30AM発見。地元小学校児童の見学後9:30AM放流するが021009牛深町西岸に死体が漂着。他報告者：西田伸(九木)、村瀬弘人(日鯨研)、坂田密。くまもと04021004/021010。毎日・西日本021005。	
0-1293	シッコウ	A	1	福岡	北九州市門司区地蔵面海岸(門司湾)	北九州市門司区地蔵面海岸(門司湾)	20021004	漂着	死亡	1.15		中村雅之	海の中道海洋生態科学館			第一発見者；正田心平(北九州市港湾局)	
	種不明鯨	D	1	北海道	利尻郡利尻富士町辰島(利尻島)	利尻郡利尻富士町辰島(利尻島)	20021004	漂着	死亡		腐敗、ほぼ白骨化。下半身ののみ?線部約3m。	佐藤雅彦	利尻町立博物館		無し	第一発見者；網谷藤徳	流で流失。

登録番号	和名	評定	群	種	郡道符	位置	西暦年月	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考	
M-385	シツツウ	A	1	1	宮城	岩沼市相野産	20021005	漂着	生存→溺死 →死亡	7.86	詳細計測有り。	佐藤公信	宮城県産産 水産事務所		DNA標本(日録研)	6:30AM発見。地元住民、福島水産館職員らが治療、救助を行い岩沼産沖に曳船し放流したが15:30名取市北釜に再漂着。17:10死亡が確認された。埋却後021012国立科博が発掘調査。他報告者：小村隆(70才)、福島水産館、吉岡泰(三重大)、萩野みちる(海の哺乳類情報センター)、松岡耕二、村瀬弘人・久藤明子(日録研)。共同通信ニュース速報・河北新報・産経(021005)。	
M-387	シツツウ	A	1	1	北海道	枝幸郡枝幸町間牧	20021007	漂着(特定定置網)	生存→死亡	4.30		池田正司	枝幸漁業株式会社		DNA標本(日録研)	5:00AM発見。網外へ出そうとするが死亡。町一輪産廃物処理場に埋却。ICRM-02-081	
O-1295	シツツウ(ハク)	A	1	1	佐賀	伊万里市立花町伊万里川上流2km(伊万里湾)	20021008	漂着	死亡	2.30		萩野みちる	海の哺乳類情報センター	毎日新聞ニュース速報 021008	全身冷凍(海の哺乳類水生生物学館)	6:30AM発見。報道ではハク(体高)。他報告者：和田淳(日録研)、吉岡泰(三重大)。朝日com021009。021011産産館が調査。	
O-1296	シツツウ	A	1	1	山口	下関市長研部町	20021010	漂着	死亡	1.21	体色黒色化、腹腔露着。	中村清美	下関海洋科学校	第一発見者；小川芳史			
M-388	シツツウ	A	1	1	北海道	茅部郡森町宇蛇谷町(噴火湾)	20021012	漂着(大型定置網)	生存→死亡	4.80		松宮俊治	森産協同組合		DNA標本(日録研)	5:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-02-082	
O-1298	シツツウ	A	1	1	宮城	名取市間上地先	20021015	漂着	死亡	1.76	腐敗、黒色化。詳細計測有り。	佐藤公信	宮城県産産 水産事務所		全身(国立科博)		
O-1301	シツツウ	A	1	1	宮城	養生館先本町大曲地内(石巻湾)	20021018	漂着	死亡	3.18	詳細計測有り。	中尾雄作	宮城県石巻水産事務所	第一発見者；阿部俊	胎皮・筋(日録研)	11:45AM川網に漂着しているのを発見。白石水産事務所、町海協、日録研でDNAによる種別を(後産院大)。	
M-389	シツツウ	A	1	1	鹿児島	川辺郡笠沙町高崎山地先	20021023	漂着(大型定置網)	生存→死亡	6.40	衰弱。第2層にP33匹有り。	原谷廣	笠沙町漁業協同組合		頭骨・胃内容物(かごしま水族館) DNA標本(日録研)	7:30AM発見。省令に基づき販売。ICRY-02-084。	
M-390	シツツウ	A	1	1	島根	隠岐郡西ノ島町大字浦郷三度(3か)地先	20021024	漂着(川網)	死亡	3.45		川原好信	漁業協同組合		DNA標本(日録研)	7:00AM発見。省令に基づき販売。他報告者：黒根果哉(産産セウ)。ICRY-02-083	
M-391	シツツウ	A	1	1	石川	鳳至郡能都町宇出津(7才)地先1km	20021024	漂着(大網)	生存→死亡	6.00		小林真樹	宇出津漁業組合		DNA標本(日録研)	地元配布の他、省令に基づき販売。他報告者：伊藤春香(東京大)。ICRY-02-085	
O-1300	シツツウ	A	1	1	北海道	札幌市東区北17条(7才)地先	20021025	漂着	死亡	1.40	腐敗、一部白化。	岡田正吾	漁業協同組合	萩野みちる氏経由	DNA標本(日録研)	12:30AM発見。日録研でDNAによる種別を(後産院大)が調査。	
O-1302	シツツウ	B	1	1	沖縄	石垣市川平湾東側海岸(石垣島)	20021026	漂着	死亡	1.30	死後経過時間と推定される。	中嶋久吉	産産水産協同組合	新聞記事(九重山) 毎日021030			
M-392	シツツウ	A	1	1	岩手	大船渡市三陸町越前(2才)地先	20021028	漂着(7才定置網)	生存→死亡	5.60		佐藤正安	産産水産協同組合		DNA標本(日録研)	省令に基づき販売。ICRY-02-086	
O-1299	シツツウ	B	1	1	千葉	館山市北条海岸(館山湾)	20021028	漂着	死亡	2.75	外傷無し	藤田健一郎	千葉県立中央博物館 館海の博物館		骨格(海の博物館)	国立科博で調検。	
O-1307	シツツウ	B	1	1	愛知	幡豆郡幡豆町中之浜(三河湾)	20021028	漂着(定置網)	死亡	1.11	詳細計測有り。	夏目明香	名古屋大学		骨格(子安和弘)	調査後埋却。	
O-1304	シツツウ	B	1	1	三重	伊勢市東大湫町北浜海岸(伊勢湾)	20021029	漂着	死亡	1.79	初産	吉田正美	鳥羽水族館		皮膚(鳥羽水族館)	021030調査後埋却。	

登録番号	和名	群	性別	都道府	位置	西暦年月	状況	生/死	体長	生物情報	報告者	所属	情報源	標本	備考
0-1303	種不明(幼)	D	1	北海道	中川郡喜望峯町勇湧沼	20021104	漂着	死亡		体長約150cm	小林真樹	漂着物字会		表皮(日鯨研)	
M-393f	シツクジラ	A	1	北海道	自製郡釧路白町地先(精製海鏡)	20021105	定置網	生存→死亡	4.20		石黒勝三 鎌倉社	石黒漁業者 鎌倉社	DNA標本(日鯨研)	5:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-02-087	
M-394f	シツクジラ	A	1	北海道	網走市能取岬地先1400m	20021107	混獲(特定定置網)	死亡	3.65		出口吉蔵	網走市会定 網走漁業協	DNA標本(日鯨研)	10:30AM発見。地元配布の他、省令に基づき販売。ICRY-02-088	
M-395f	シツクジラ	A	1	北海道	余市郡余市町港町	20021111	混獲(定置網)	生存→死亡	5.70		中島辰浩	中一 共栄 丸島業者 国立科字博 物館	DNA標本(日鯨研)	省令に基づき販売。ICRY-02-089	
0-1305	オホクジラ	B	1	山口	豊浦郡豊浦町磯玉大磯浜	20021111	漂着	死亡		物部切堀、推定体長4.8m。	山田格	動物・動植物・産物・生虫・皮膚(国立科博)、死体分析標本(産婦人科、自然医学研究所、国立科博)、腎・副腎(高取大、国立科博)	021122調査。豊浦産研究センター・国立科博らが発見。他報告者：小林知吉(豊水産研究センター)。		
0-1309	アホクジラ	C	1	北海道	松前郡松前町字赤神37	20021112	漂着	死亡		頭部破損、体長約3m。	武原卓志	清立造船水産試験場 名古屋大学 大学院	DNA標本(日鯨研)	7:20AM発見。町が発見後凍結センターに埋却。	
0-1308	オホクジラ	B	1	愛知	瀬西市西通町(豊田湾、三河湾)	20021113	漂着	死亡	1.34	脂肪、詳細計測値有り。	夏目明香	名古屋大学	骨格(子安和弘)	調査後埋却。	
M-396f	シツクジラ	A	1	鳥取	八雲郡美保町町表保間地先	20021116	混獲(定置網)	生存→死亡	4.80		刈谷茂	美保町大敷網組合	DNA標本(日鯨研)	9:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-02-090	
M-397f	シツクジラ	A	1	和歌山	東牟婁郡那智勝浦町大字字久井	20021117	混獲(大型定置網)	死亡	5.80	一部計測値有り。	嶋井勝弘	宇久井漁業協同組合	DNA標本(日鯨研)	7:00AM発見。袋網付近のロープに絡まって死んでいた。他報告者：橋爪健(那智勝浦町)。省令に基づき販売。ICRY-02-091	
M-398f	シツクジラ	A	1	高知	土佐清水市足沼岬椎ヶ釜沖	20021120	混獲(定置網)	死亡	4.65		山下幸利	伊佐共同大 敷組合 名古屋大学 大学院	DNA標本(日鯨研)	省令に基づき販売。ICRY-02-092	
0-1310	オホクジラ	B	1	愛知	瀬西市瀬西町伊川津(三河湾)	20021120	漂着	死亡	1.20	腐敗。詳細計測値有り。	夏目明香	名古屋大学	骨格(子安和弘)	021122調査。胃内容物1L・1仔・魚。解剖後埋却。	
M-399f	シツクジラ	A	1	青森	下北郡大畑町大字木畑字二枚橋地先(津軽海峡)	20021121	混獲(小型定置網)	生存→死亡	4.40	腐敗。	浜田龍太郎	津軽漁業協同組合	DNA標本(日鯨研)	8:30AM発見。網外へ出そうとするが死亡。省令に基づき販売。ICRY-02-093	
M-400f	シツクジラ	A	1	宮城	牡鹿郡牡鹿町金華山	20021121	混獲(定置網)	生存→死亡	4.80		児玉信夫	牡鹿漁業協同組合	DNA標本(日鯨研)	6:00AM発見。網外へ出そうとするが死亡。省令に基づき販売。ICRY-02-094	
M-401f	シツクジラ	A	1	富山	氷見市大境沖(富山湾)	20021125	混獲(7リットル定置網)	死亡	4.70		澤本英一	酒浦定置漁業協同組合	DNA標本(日鯨研)	5:00AM発見。省令に基づき販売。ICRY-02-095	
M-402f	シツクジラ	A	1	岩手	宮古市垂茂(柱口半島)伊崎地先	20021127	混獲(定置網)	生存→死亡	5.20		大井誠治	宮古漁業協同組合	DNA標本(日鯨研)	13:30発見。省令に基づき販売。ICRY-02-096	

*表中の「群」は鯨種判定の信頼性を区分しており、Aは日鯨研職員が調査や写真等によって鯨種を確証した個体、Bは他の研究者の方が鯨種を判定された場合、Cは鯨種の判定はさされても判定者が不明で判定に疑問がある場合等、判定が相違による場合が多い場合を示しています。また「種」「属」各欄は、学名記載のラテン語の学名のみを記入してあります。「体長」はmで記載してあります。記録番号の欄文字の“0”はハフジラ、“M”はヒツクジラ、“P”は髯髯鯨種を示します。“E.X.”はストランドレンディングの分類(鯨研報告387)にはあてはまらないもの、希少種の目撃や珍しい事例について寄せられた情報を紹介しています。
* (脚) 日本鯨類研究所では、日本沿岸に漂着、迷入、混獲した鯨類の標本(3437リットル)の調査、記録を行っております。ストランドレンディングを発見したり、新聞記事などの情報がございましたら、ぜひ日本鯨類研究所までご連絡ください。